

経 済 民 生 常 任 委 員 会 記 録

令和2年1月15日(水)午後1時30分～午後3時34分(9階 908 会議室)

○出席委員(8名)

委 員 長	二階堂武文
副委員長	佐々木 優
委 員	高木 直人
委 員	川又 康彦
委 員	石山 波恵
委 員	阿部 亨
委 員	小松 良行
委 員	山岸 清

○欠席委員(なし)

○市長等部局出席者(なし)

○議 題

「古関裕而氏を活かしたにぎわいの創出に関する調査」

- (1) 参考人招致
福島市音楽文化総合アドバイザー
三浦 尚之氏
- (2) 意見開陳
- (3) 当局説明意見開陳のまとめについて
- (4) 行政視察について

午後1時30分 開 議

(二階堂武文委員長) ただいまから経済民生常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

初めに、参考人招致を議題といたします。

本日の参考人招致は、古関裕而氏を題材としたNHK朝ドラ誘致に長年かかわってきましたこれまでの取り組みの経緯や古関裕而氏を生かしたまちづくりの理想の将来像などを聴取するため、福島市音楽文化総合アドバイザー、三浦尚之氏にお越しいただいております。

参考人招致に関して注意事項を申し上げます。1つ目、参考人は、あらかじめ依頼した事項、事前

質問について、意見を準備して出席いたします。そのため、事前質問以外の事項について意見を求めた場合、委員長は委員の発言を制止することができますので、ご了承願います。ただし、参考人の了承を得られるならば、意見を求めることができます。

2つ目、参考人招致には、証人と異なり、百条調査のような強制力がなく、委員から依頼して出席を求めるものですので、参考人に対し礼節を尽くし、追及するような質問をしないでください。

3つ目です。本日のスケジュールは、参考人招致実施要領及び次第のとおりです。スムーズな議事進行にご協力をお願いしますとともに、せっかくの機会ですので、有意義な会議になるよう活発な質疑をお願いいたします。意見の開陳についてはそれぞれ約60分、質疑応答に約30分、計90分以内で行います。

参考人招致終了後に、次第のとおり、意見開陳を委員のみで行います。

なお、お手元の参考人招致実施要領については、前回の委員会で確認したものから内容の変更はございませんので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、報道機関の皆様にもお越しいただいておりますので、皆様のご協力よろしくお願いいたします。

それでは、これから参考人をご案内してまいりますので、暫時休憩いたします。

午後1時33分 休 憩

午後1時40分 再 開

(二階堂武文委員長) それでは、委員会を再開いたします。

本日は、市の音楽文化アドバイザーとして、今回の古関裕而氏を生かしたまちづくりをはじめ、市の音楽文化、芸術の振興に広く取り組んでいただいております、またご自身の活動を通じて、世界や日本全国を舞台に音楽、芸術の振興と音楽のまちづくりに取り組んでこられましたこれまでの経験からさまざまなご意見を伺い、調査の参考とさせていただくため、福島市音楽文化総合アドバイザー、三浦尚之様にご出席をいただいております。

この際、参考人に一言ご挨拶を申し上げます。本日はお忙しい中、経済民生常任委員会のためにご出席をいただき、誠にありがとうございます。経済民生常任委員会を代表しまして心から御礼を申し上げます。忌憚のないご意見をお述べくださいますようお願い申し上げます。きょうはひとつよろしくお願い申し上げます。

それでは、早速ですが、議事の順序等について申し上げます。初めに参考人からご意見をお述べいただき、その後委員の質疑にお答えいただくようお願いいたします。

それでは、参考人からご発言をお願いいたします。着席のままお話しをいただければと思います。よろしくお願いします。

(三浦尚之参考人) ありがとうございます。このような私がお招きいただきまして、お話しできます

ことを大変光栄に、そしてニューヨークなまりのズーズーズ弁でお話ししますので、どうかご理解いただければと思っております。

まず、こちらにございますように、朝ドラ誘致にかかわるこれまでの取り組みと経緯についてですが、少し私の経験も含めてお話しさせていただければと思っております。

まず、私はミュージック・フロム・ジャパンというものをニューヨークで主宰しております、ことし45年を迎えているわけなのですが、そういう関係でNHKの方々との交流が大分ございました。一番最初に書いてあるのですが、ミュージック・フロム・ジャパンの人脈というか、いろんな今までの45年間のおつき合いの中で板野専務理事という方とお目にかかるチャンスがございまして、彼の意向というか、彼の導きというか、彼の熱意があつて、今回のエールが成功することになったのではないかなと思っております。もう一つは、総括プロデューサーというのでしょうか、制作プロデューサーですが、彼が土屋さんという方なのですが、この方も非常に音楽が好きで、ミュージック・フロム・ジャパンのことも知っておることと、もう一つは彼が高校時代にトロンボーンか何か演奏してまして、アメリカの高校に留学をして、余りにも自分がレベルが低いので、やめて、日本に戻って、東大に入りまして、その後にNHKに就職したという経緯があります。大分親からは責められまして、何であんな安い給料のところに行くのかと、むしろ商社に入ったほうがよかったのではないかと大分兄弟も含めて言われたらしいのですが、ただこのお二人に私が出会ったこと、この出会いが今回のエールに結びついたのではないかなというふうに思っております。

私の結局手帳からメモを取り出しまして、メモというより手帳から抜き出して書いたわけなのですが、2010年の5月に福島市の教育長からアドバイザーという委嘱状を交付されたわけなのですが、そのときに委嘱状をいただいた後に教育長のほうから、何か音楽堂については割と全国に周知されているけれども、音響がいいということもあるのですが、しかしながら、何かほかに全国に周知されるようなものはないかという相談というよりも意見がございまして、そのときに私のほうも、そうですね、ちょっと思いつかなかったのですが、では考えてみましょうということで終わったわけなのですが、その後にご存じのように震災がございまして、それは次の年の2011年、次の年の3月の11日ということで、そういうことも考える暇もなくおったわけなのですが、大体いろいろと1年間の間に、では何を全国に知ってもらうことが可能なのかと、あるいは何がいいのかということを随分と考える時間ができまして、古関裕而、名誉市民だけではなくて、すごくたくさん曲を全国の小中高を含めて、応援歌も含めて書いていらっしゃる、作曲なさっているということを思いつきまして、では古関裕而をNHKの朝ドラまたは大河ドラマでどうかなというふうに考えたわけなんです。

では、どうしたらいいかなということで、福島の放送局長が当時やっていたので、彼のところに行きまして、実はこういうことなのだけれども、どうなのでしょうかと話を差し上げました。ただ、まず大河ドラマは時代劇なのだと、それから朝ドラはヒロインだと、該当なしと随分冷

たく断れました。それが基本的に毎年お願いに行ったのですけれども、3年間だめでした。なぜだめかなと思って、後でいろいろ聞いてみたところ、つまり放送、報道というのでしょうか、それと制作局、この2つが全く縦割り行政で、お互いに交流がないと。ですから、制作がNHKの制作局がやっていて、つまり朝ドラと大河ドラマだけはNHK本体がやりまして、あとはドラマとか、そのほかのものは全てエンタープライズがやっているという、そういうことを初めて知りました。そんなことで、では古関裕而がだめだったら、では何がいいかなと思ひまして、金子という奥様なのですがけれども、それと夫婦の物語としていかがでしょうかという提案をしました。事例があるのではないですかと。水木しげるというゲゲゲの女房があるのではないかということをしましたのですけれども、余り興味はないということで断られたという経緯があります。

それで、2013年の次のことになるのですけれども、8月に私がニューヨークでいつも夏の間、大学にそのとき勤めておりましたものですから、大学の休みを利用してニューヨークに行きまして、いろいろと準備をする関係上、NHKのニューヨークではなくて、アメリカの総局長に、2年ごとにかわるものですから、今度かわったということでお伺いしまして、その方にちょっとお話を差し上げました、朝ドラに関して。そうしましたら、自分は報道なので、余りよくわからないと。ただ、ニューヨークにNHKエンタープライズの子会社がある、その副社長、青木さんという方だったのですけれども、紹介するからということで、その方にすぐたくさん資料を持っていきまして、お話をさせていただきました。それが日本に送られたらしいのですけれども、結局答えはノーだったわけです。

そういう事情がありまして、これはなかなか難しいなと思って、諦めるということももちろん考えたわけなのですけれども、とりあえず私も大変、45年もミュージック・フロム・ジャパンをやっておりますものですから、しつこく追ひまして、2014年に、また今度新しい局長が就任しましたものですから、この人は今村さんという方で、日本にお帰りになってからは国際放送局長になっておりましたけれども、この方に私のほうからちょっとお願いしまして、お話しさせていただきました。もうこういうものは絶対にトップダウンしかないのだと、トップダウン以外にはもうあり得ないのだということ盛んに言われました。では、どうしたらいいのですかとお願いしたわけなのですけれども、そうしたら専務理事、板野さんという方なのですから、この方に話をするのが一番だろうということです。そうしたら、では可能性はあるのですかといったら、全然わからないがということだったのですけれども、とりあえず日本に帰ってきましたから、専務理事というのは私もしかしたら知っているのではないかと思ひまして、たしか2007年に私が外務大臣表彰をいただきましたときに彼がいらしてくださいまして、面識があったものですから、彼に電話してみましようということで、2ページになりますけれども、2015年、大体2015年にこの話はしたと思うのですけれども、2015年の6月の22日に板野さんと会うことができました。これも私は思うのですけれども、やっぱり人と人との出会いと、それから運だと思ひのですけれども、それがなかったら会ってくれなかったと思ひますけれども、会っていただいたということは私も運がよかったなとつくづく思っております。

彼が話をしたのは、震災のこともあって、八重の桜を会津でおやりになったというので、板野さんがおもしろいと、古関裕而おもしろいと、もう一度だけ福島を何とか盛り上げたいのだということをおっしゃってくださいました。あっ、これはもう可能性があるのかなと思って、ちょっと信じられなかったのですけれども、大変うれしく、飛び上がって福島に戻りました。それで、戻る前に板野さんのほうから、次回来るときには市長さんをお連れなさいということだったものですから、市長さんに日程をとりまして、2015年の7月でしたけれども、それから市長さんだけではなくて、商工会議所、つまり経済界も応援していますということで会頭を、渡辺さんでしたけれども、一緒に3人でお伺いしました。そのときに朝ドラの話を熱を込めて一生懸命要望しました。そうしましたら、若泉制作局長が同席いたしまして、彼も、興味を持ったかどうかわからないのですけれども、とりあえず上からのあつれきもありまして、考えてくださったのではないかと思います。

その後に陳情ということになるわけですが、板野さんに陳情はどうしたらいいのでしょうかということ話をしました。そうしましたら、板野さんのほうから、陳情のときはなるべくたくさんの人を連れてきなさいと。関係者だけではだめだと。それで、どうしたかといいますと、飯坂と、それから土湯と、それから高湯のおかみさんを、ちょっと華やかにしましょうということで、皆さんに来ていただいて、そのほかに観光とか、いろんな方々をお願いしまして、豊橋市のほうも市長さん以外にいろんな方がいらしてくださいまして、19名、総勢でお伺いした経緯があります。ただ、NHKというのは非常に出入りが難しくて、前もって、19名にもなると、やっぱり1週間ぐらい前までにはメールで、誰々が何をやっているかということと言わなくてはいけないのです。そうしないと入れないものですから、受付で断られてしまいますものですから、それを全部やりまして、豊橋市のほうは教育委員会のほうで、教育部長がおやりになりましたけれども、それで全部の名簿を私から送りまして、それで19名で陳情いたしました。要望書を渡しまして、2020年という節目のときをお願いすると。しかし、私はそのときに、万が一2020年のオリンピックでだめなときには2021年でも大丈夫ですよ。といいますのは震災10周年ということもありますからということをお口頭でしたけれども、お話しさせていただきました。

それが第1回目の陳情だったのですけれども、もちろん私自身はNHKとはこういう、ここに書いてあるだけではなくて、何回もいろいろと個人的にも訪ねて、いろんなことを人脈をつくってきたわけなのですけれども、ニューヨークで私を取材したNHKの方が数名おりましたものですから、その方々にいろいろと聞いてみたのです。そうしましたら、まず陳情するに、要望するにでも熱意が必要なのだと、いかに情熱を持って話すかと。もう一つは、大河ドラマの場合は署名活動が効くかもしれないということを伺ったのです。それで、後でそのことを商工会議所と福島市のほうで一応やってみてくださいまして、署名活動、約18万ぐらいでしょうか、豊橋市も含めて、それをつくっていただいたのですけれども、後で聞きましたところ、制作局としてはそれは持ってこられても困るのだと、すぐ返しますからと、見もしないということをおっしゃいました。実際そう言われたのです。それで、ではどう

したら、でも市民の民意だと、これは民意だから、一応持っていく必要があるのではないかとということで、ではどうやって持っていったらいいかということのをいろいろと話をしまして、写真で撮って、私が提案しまして、1枚だけ写真を撮りましょうと、あとは何名かということのを人数を書いて持っていけばいいのではないのでしょうかということを持っていきました。

第2回目の陳情だったのですけれども、担当理事もかわっておりましたし、制作局長もかわっておりましたし、そのときに要望書と一緒に署名活動の実績を差し上げる予定だったのですけれども、19名のうち覚えていたのは私だけで、あとは全部忘れておまして、それで基本的に出さなかったのです。あれっ、どうしたのと言ったら、あっ、忘れていたなんていうことで、ではもう一遍やり直しましょうということで、署名活動の写しをもう一度差し上げてまして、それを写真を撮って、民意を皆さんに見てもらったと、NHKの方々に知ってもらったということがございました。

2018年の2月なのですけれども、これは大事なことで、木幡市長と私と2人でNHKの藤原ドラマ部長と、先ほどお話ししました土屋プロデューサー、チーフプロデューサー、統括をしていますけれども、彼にお会いしまして、お話をしました。木幡市長は、いかに震災後、福島を含めて、活性化あるいは復興のためにはいかに大事なのだということのを熱弁を振るっていただきまして、本当に福島のためにぜひともということをお願いしました。私のほうは、むしろ古関裕而と、それから金子の出会いとか、それから駆け落ちした話とか、それからハイカラさんと言われた時代とか、そういう個人的なものをなるべくドラマ化してもらえるような話をやる説明いたしまして、後から聞いた話ですけれども、藤原ドラマ部長が最終決断するわけなのですけれども、彼が、この2人で、木幡市長と私がお伺いしたときに決めたということのを言うていただきました。陳情2回やりましたけれども、それではなくて、今回直接我々2人がドラマ部長とチーフプロデューサーにお話ししたことが効き目があったのだということのを後から聞きました。だから、よかったかなと思っていますけれども。

それから、2019年の2月の27日、大体1年前のことになるのですけれども、ニューヨーク時間の2時半、朝の2時半、日本時間で16時30分って午後ですけれども、このチーフプロデューサーから私がニューヨークにいる間に国際電話がありました。もちろん出られなかったのですけれども、次の日にメールを受け取りまして、そのメールが皆様のお手元の4ページにございますが、そこに真ん中ら辺に三浦様と書いていまして、お世話になっています。ご報告が遅くなりましたが、先ほどお電話したのですが、海外にいらっしゃるようでしたので、メールでご報告させていただきます。日本時間の2月28日、つまり次の日、11時から、2020年4月の連続テレビ小説の企画発表を行いますと。そこで、古関裕而さん夫妻をモデルにしたドラマの制作を行うということを発表させていただきます。詳細は発表後にネットでご確認いただけると幸いです。三浦様には引き続き、よろしくお願いいたします。下のほうに、この情報は、NHKからの正式な発表があるまで、三浦の胸にしまっておいてくださいと。福島市長の木幡様には、本日夕方にご連絡をさせていただきましたと。よろしくお願いいたします。これが最終決断されたときのメールです。なぜここに添付しましたかということ、私のメモです

っと今まで説明してまいりましたけれども、一応努力したかいの結果だということで皆さんに知っていただきたいと思った次第です。

それで、同時に私のほうから民報と民友に電話をしまして、決定したということで、共同通信が発表なされた後に号外を出していただいた経緯がございます。

2 ページの一番最後なのですけれども、2019年の6月25日の4時に、エールが実現したことでチーフプロデューサーにNHKでお会いしまして、御礼を申し上げました。そうしましたら、彼も立ち上がって、私に、私の長年にわたる熱意が通じたのだということをおっしゃっていただきまして、私も感無量というか、やったかいがあったなと、ほっとしました。

大体以上が経緯なのですけれども、実は最近板野さんとお会いしましたら、こんなことをおっしゃっていました。朝ドラで陳情されたのは初めてだと、NHKとしては。大河ドラマはしょっちゅう、年に何回か来るのだと。しかし、朝ドラは初めてだと。今回成功したことによって、今や何か、年に少なくとも数カ月前までは2件の陳情があったと、朝ドラに関して、言っておりましたので、我々は最初に成功したのではないかと。ですから、あちこちのおそらくこれからいろんなところからNHKにも陳情するでしょうし、要望もするでしょうし、あるいは福島市のほうに伺って、どうしたらうまくいったのだろうという話をされるのではないかなと思うのですが。ただ、そういう経緯で今までやってきまして、とりあえず朝ドラが決定ということになった経緯を少しお話しさせていただきまして、ありがとうございました。

少し早口なもので、皆さん、どうでしょうか。わかりましたでしょうか。大学で教えていたときは90分なのです。90分ですと、大体学生からの授業評価がありますので、80分ぐらいで終わらないと、いい評価をもらえないです。これ内々、ないしょの話。そんなこともございまして、とりあえず朝ドラが成功したということは大変うれしく思っております。黒子でずっと長い間、9年半ぐらいでしょうか、何とか来れたことは、これもいろんな方々の出会いと、そして皆さんのお力添えのたまものだと思っておりますし、事務局で例えば要望書をつくっていただいたときに、陳情書のこととか、作成していただいて、資料も作成していただいて、それから商工会議所のほうも署名活動をしていただいたり、皆さんのお力添えでここまでやってこられたのだと思います。そんなことで、これからどのようにしてこの朝ドラを福島市のためになるかということを我々考えていかななくてはいけないのではないかな。将来のことを、この終わってしまった後のことを考えていかななくてはいけないのではないかなというふうに思っております。

3 ページに入りますが、古閑裕而を生かしたまちづくりの将来像ということでございます。実は歌謡界というのがありまして、この歴史上で名前が知られているのが中山晋平と、これ1887年に日本で初めて流行歌として慕われた。例えば復活という演劇の中でカチューシャの唄というのがありますけれども、それはもう全国的にはやりまして、流行歌ということで初めてレコードをつくったのです。そういった意味で中山晋平というのは有名な方です。

それから、2番目に古賀政男、1904年、これは演歌、それで非常に有名な方です。

それから、3番目に服部良一です。1907年生まれで、これはジャズを音楽に取り入れたということで、例えば、ご存じの方はいらっしゃるかもしれませんが、戦後、笠置シズ子というのがいまして、東京ブギウギというのがありまして、あるいは青い山脈と、あるのですけれども、これを作曲した人で、大変有名な方です。

米印があるのですが、古関裕而音楽コンクールについて少し説明させていただければと思います。実はこれ5ページにちょっと書いてありますので、ちょっと見ていただけるとうれしいのですが、世界で有名なコンクールといたしますのはチャイコフスキー・コンクール、それからショパン・コンクール、ヴァン・クライバーン・コンクールなんかが非常に有名なのです。また、日本では毎日新聞社とNHKが主催する日本音楽コンクールがあるのです。これは、最も日本で古くからあって、大変有名な、ここで新人の登龍門と言われているわけですが、大変有名なコンクールです。NHKの交響楽団が主催する尾高賞とか、サントリー芸術財団が主催する芥川作曲賞とかがあるわけですが、ただ先ほどお話ししました3人の著名な歌謡界の作曲家のコンクールはないのです。

ですから、ある意味ではエールをきっかけにこれからますます古関裕而は有名になるとは思いますけれども、コンクールを、毎年でなくとも、2年に1度でもいいのですけれども、100年間やることができるものではないかなと思いますし、小中の、あるいは若い人、子供たちが夢を持って、自分もこのようにコンクールに入ってみたいとか、あるいは作曲家になってみたいとかいうような、子供たちに夢を与えるようなこともできるのではないかなというふうに思った次第なのです。末永く、一過性のものではなくて、100年を、50年でも継続できるような催し物になるのではないかなと思っております。

主催は一応福島市なのですが、共催としてNHKエンタープライズ、これは板野さんが専務理事が非常に興味を持って、NHKできる限りのことはやりますということをお願いしておりますので、多少はうまくいくのではないかなと思います。鉄は熱いうちに打ちなさいと言われていきますように、できたら開始時期を2021年から。といいますのは、この2020年の間に仕込みをしなくてはいけないということになりますけれども、果たしてこの私の企画書が文化振興課のほうには行っていますけれども、うまくいくかどうか。

シンフォニーの中に、たしか6ページにも書いてあると思うのですが、ちょっとシンフォニーのページにあるのですが、ここの6ページの一番下のほうですか、4番目に古関裕而音楽コンクールの新設の検討と書いていますけれども、その下に古関裕而楽曲の編曲、作曲とあります。これは、私が提案したのと違いまして、作曲、編曲なのです。といいますのは、編曲になりますと、古関裕而の曲を編曲するということになりますので、著作権がかかわるのです。著作権というのはコロムビアレコードと、それから音楽著作権協会、ここでもかなりのお金を取られるということになりますので、作曲、そして編曲というふうにしたほうがよろしいかと思って、私の企画書にはそういうふうを書いてございます。

コンクールの内容ですけれども、古関裕而にちなんだ子供のための作曲、編曲賞を創設したらどうでしょうか。入賞の作品については、各小学校、中学校にその曲を配布して、再演をお願いすると。案としては、なるべく子供たちが歌って踊れるようなポップス系のものがないのではないかなと思うのですけれども、もちろんここには室内楽とかクラシック系が書いてございますけれども、いろいろとそれはこれから検討の余地があると思います。

懸賞ということで、栄誉賞なのです。1位が10万円、非常に安い。普通は100万円ぐらいあるのですけれども、これは栄誉賞ということで10万円、2位が7万5,000円、3位が5万円。

副賞としまして、ここで、できたら大ホールか小ホールで彼らの演奏を発表したらいいだろうと。発表の場を与えるというのは非常に大事なのです。ただ受かった、優勝したではだめなのです。やっぱり彼らの場をつくってあげるということにおいては非常に夢が膨らむだろうと思いますし、またネームプレートを書いて、3位までの名前を書いてあげると、古関裕而記念館に掲示してあげるということになると、栄誉賞としても10万円です。十分ではないかなというふうに思っている次第です。

広報のほうは、ホームページにて公募すると。

審査員は、ここに書いてありますように、池辺晋一郎、これは文化功労者と、作曲が専門です。それから西村朗、エリザベート国際コンクールで大賞をとっております。作曲家です。野平一郎は東京芸大の教授ですけれども、紫綬褒章とか日本芸術院賞なんかをとっております。また、みんな、この3人ともニューヨークに私が招聘した人たちですから、いつでもお受けしてくれるとは思っています。このようなことをやっていったらどうかというのが私の希望です。実現できればうれしいなと思っている次第ですけれども、できる限りできればいいなと思っています。

それから、もう一つ、3ページに戻りますけれども、古関裕而音楽祭、毎年やっておりますけれども、やはりせっかくですから、窪田正孝ですか、古関裕而の役を演じます窪田正孝と、それから二階堂ふみ、そういう人たちに毎年来てもらおうと。これは、エンタープライズが言ってくれると思います、招聘に関しまして。もちろんマネジャーがどうするかわかりませんが、とりあえずエンタープライズのほうでこういうことはできると思いますので、少し盛り上げることができるのではないかなと思っています。それが2番目の古関裕而を生かしたまちづくりの将来像についての私からの提案でございます。

それから、3番目なのですが、音楽や芸術を生かしたまちづくりにもたらす効果と、それから魅力についてです。これは、福島の温泉地、飯坂と土湯とか高湯とか、有名なところがあるのですけれども、そこに約1週間ぐらいのフェスティバルを開催したらいいのではないかなと思った次第なのです。随分前なのですが、15年ぐらい前なのではないでしょうか、瀬戸市長に私のほうから、ヨーヨー・マというチェリストがいるのですけれども、これは世界で最も著名なチェリストで、彼はその当時1回の演奏で大体1,000万円と言われていましたので、かなりの、小澤征爾が200万円ぐらいだったと思いますので、彼がもしも福島に来て音楽祭をやっていただければ、世界中から集まります。間違いありません。ヨー

ヨー・マはどこの音楽祭にも顔を出してないのです。バーンスタインがボストンで音楽祭がありますが、でも、そこで教えたときにいろんな日本人も行って指揮を学んだ経緯がありますけれども、このヨーヨー・マがもしも来てくれることがあったら、それこそ福島は世界の福島になるのではないかなと思っておりますし、彼にリサイタルのほかにマスタークラスをやってもらおうということでどうでしょうかということで、その当時の瀬戸市長にお願いしたのですけれども、余り興味はなかったみたいです。

それから、日本では草津音楽祭というのが、これは上皇后が毎年行ってピアノを弾くのですけれども、そのほかに別府アルゲリッチというのですか、アルゲリッチも非常に有名な、世界で有名なピアニストです。国際音楽祭があるわけですが、そういったところに福島でも温泉地で音楽祭を開催したらどうなのかなというふうにちょっと思った次第です。

それから、3ページの米印、最後なのですけれども、音楽堂に既存のプロの小編成の福島市出身、福島出身の音楽家によるオーケストラを創設したらどうかなというふうに思っております。何でもこんなことを話しますかという、皆様のお手元に、6ページにあるのですけれども、実は福島にはプロのオーケストラがないのです。プロのオーケストラがないということは、大体今福島市出身と近隣の郡山も含めて、あるいは二本松とか伊達市も含めて、約三十五、六名がいるのです。それはどこにいて、東京なのです。東京でプロのオーケストラに所属をしたり、あるいは演奏で呼ばれたりして、行っているわけなのですけれども、その方々は、福島だったら、交通費出してくれば来ますよと、福島で演奏したいと、親御さんの前で演奏したいと。やっぱり自分の息子が、娘が福島で演奏できるということに関しての親の興味と、それからプライドと、誇りというものが必ず伝わってくるのではないかと思いますし、これが福島にとっても人材育成のためにもよろしいのではないかなというふうに思った次第です。

こちらにる趣旨とか目的とか書いてございまして、第1番目、一番大事なのは、次のページにあります、7ページなのですが、では音楽家をどういうふうにして、基準はどうなるのですかということなのですが、やっぱり主に福島市及び近隣出身の演奏家であって、親も、親族が福島に住んでいるということを条件にすると。それから、2番目には音楽大学または大学の音楽学部の卒業生であること。プロであるということです。それから、3番目には現在東京または仙台のプロのオーケストラあるいはエキストラとして活動していると。それから、4番目に福島市を愛し、音楽文化のすぐれた創造のまちづくりに熱い思いと誇りを有している音楽家たち、そういうことになります。

実は5年前から福島市音楽堂で芸術公開講座を開催しているのです。これは、福島市出身の方で、それで親族が福島に住んでいて、それでプロで活躍している人たちをリサイタルやってもらおうと。リサイタルをやるというのは、大体1時間半、自分一人で演奏しなくてはいけないわけですから、もちろん伴奏はあっても、メインはその方です。それができる方というのは、これは大変なものなのです。やっぱり1時間半1人で演奏するということは、なかなかできない。そういう人たちがたくさんいる。

満員なのです、いつも。なぜかというと、彼ら自身が親戚も含めて皆さん来てくださるのです。そうすると、非常に成功しまして、音楽堂の自主事業の中で黒字になっているのはこの芸術公開講座だけなのです。その延長ということで、この小編成のオーケストラをつくったらどうだろうかなということが私の希望であり、願いであるわけです。それによってエールの後のいかにして福島の活性化に寄与するかということで、いろんな案を私は出したわけなのですけれども、皆様がどう思われるかちょっとわかりませんけれども、以上が私の提案の内容です。

それから、1つ、余計なことなのですけれども、シンフォニーというのは昔から4楽章なのです。ですから、これはハイドンの時代から、モーツァルトも含めて、4楽章なのですけれども、今回は3楽章で終わっていましたので、専門家の意見ですから、一般的には知られていないかもしれませんが、歴史上にはそう書いていますけれども、文献には書いています。だから、木幡市長にはこの旨伝えました。4楽章にしたらどうでしょうか。コンクールを4楽章に入れたらどうでしょうかとお話ししました。でも、今のところは3楽章と。シューベルトの未完成もありますので、あれは2楽章です。でも、それでも有名な作品ですから、たとえ3楽章でもシンフォニーと言っているのではないかなと思いますけれども、そんなことでいろいろと今までの経緯とそういった希望を含めて皆様にきょうは、ぶしつけだということはわかっておりますけれども、お話しさせていただいた次第です。どうもご清聴ありがとうございました。

(二階堂武文委員長) どうもありがとうございました。熱く情熱を傾けてご説明をいただきまして、本当にありがとうございました。

以上で意見の開陳は終わりました。

次に、質疑のほうを行いたいと思います。ご質疑のある方お述べください。

(小松良行委員) ありがとうございます。福島とのご縁は、2010年5月の教育長からアドバイザーの委嘱を交付された後からということで、おおむね10年間ということで、長きにわたりまして本市とのこうしたおつき合いをいただいていますことを感謝申し上げますけれども、この朝ドラについて、古関裕而氏の、先生にとっては、魅力、これほど熱意を持って朝ドラを誘致するにあたりご尽力いただいた、その背景には、古関氏、そして金子夫妻との何かご縁を感じたのか、あるいはそうした能力、才能について、造詣として深く、ぜひこれをという、何が一番の魅力だったのかということをお尋ねしたいと思います。

(三浦尚之参考人) 1つは、古関裕而の作品には、例えば文化もあるのですけれども、哀愁を感じるのです。哀愁を感じるというのはどういうことかといいますと、やはり福島で生まれ育って、福島の盆地の中で生活をした、若い時代ですけれども、その文化というものが伝わってくるのではないかと。私は福島で生まれ育って、福島に戻ってきているわけですが、そういった意味で非常に何となく、偉大な作曲家が福島で生まれたのだなということに対して私自身が共感しまして、何とか、例えば栄冠は君に輝くはよく歌われている、甲子園でやっているのですけれども、作曲家というのは誰も

知らないのです。そういうことではなくて、このエールを通してみんなに知っていただくということをぜひともやりたいなと思ったのです。

あとはこのエールの後に、私はニューヨークで福島県人会というものをつくったのですが、福島県人会には福島市の人が余りいないのです。七十数名今いるのですが、ただ役員会を開きますと、私がニューヨークに行ったときにいつも役員会は開くのですが、大体集まるのは10名程度なのです。ですから、県のほうは、正直言って、もういろんなことを言ってくるのです。県人会ということがありまして、国際課が担当しているのですが、余りにも大変なので、もう適当にやめておけと言ってはいるのですが、とりあえずこのエールが出ますと、アメリカでも放映されますし、それからヨーロッパでも放映されます。そうすると、福島県人の方々は再認識するのではないかと。将来もしも可能であれば、古関裕而の音楽の個展とか、コンサートをニューヨークで開催することも可能ではないかなと思っているのですが、そんなことで私の思いは、これに情熱をかけたというのはやっぱり古関裕而が福島で生まれ育って、私もそうであったということではないかなと思います。

（佐々木優委員）大変お話を聞いて、三浦先生がこれまで尽力いただいてきた足跡が見えて、本当に感動して、あとありがたいなという気持ちでいっぱいです。

それで、福島市がこれからさまざまな事業をしていくにあたって、まずはエールを契機にということとでいろいろ事業が取り組まれていくわけなのですが、先生がおっしゃった100年続けていけるものというのは私とても、それが今必要なのではないかなととても思っていて、その100年続けていけるものに、おっしゃられたさまざまコンクールなんかがあるのですが、例えばほかの地域でこういうものがあるよというのを念頭に置かれて、こういう企画を出されたということなののでしょうか。それとも、そもそもこれが本当に未来につながっていく、子供たちが成長していくにあたって必要だというふうにお考えだったのか、その辺の考案されたいきさつとかを教えていただければと思います。

（三浦尚之参考人）やはりコンクールというのは非常に音楽家にとっては夢の世界なのです。ここで優勝するということは、どれだけの努力があったかということだと思います。いろんな方々がそのコンクールを目指してくるわけですが、そこで自分は1位になるか、2位になるか、3位になるか、あるいは入賞するかわかりませんが、そういうことをやっぱり将来の子供たちに見てもらいたいと、それが福島のこれからの福島人をつくっていく、福島の人間をつくっていく誇りにもなってくるのではないかと。文化の一環として私はこういうことも福島市にとってよろしいのではないかと。思って発案したのですが、もちろんこれによってどういう相乗効果があるかわかりませんが、経費が余りかからないということですし、NHKが非常に乗ってきておりますので、可能ではないかなということを思っております。私ももう年齢的にもやっぱりそういう時代になっておりますので、何か礎とか、何か残しておきたいなということでは思っています。

(川又康彦委員) 大変貴重なお話、本当にありがとうございます。今の質問に少し関連しているのですけれども、今まで三浦先生が2つ、コンクール並びにオーケストラの創設企画のほうを提出していただいて、福島を音楽で新たなまちづくりをしていきたいという思いを非常に聞かせていただきました。私自身も福島、昔でいうと、例えば合唱王国福島と言われている中、その当時担っていたのがほとんど県北の高校が非常に金賞とか、そういったものをとっていたのが、いつの間にか郡山のほうに移ってしまって、楽都という名前まで郡山に移ってしまって、非常にじくじたる思いがある中で、こういった活動をしていただいているのは本当に心強い限りだと思っています。特にうちの近所にも、プロとしてやっているのかどうかかわからないですけれども、クラシックのピアニストの方がいらっしゃって、やはり地元でリサイタルとか、そういったものを、何年かに1回ぐらいしかできないのですけれども、そういったものもやっている中で、こういうオーケストラ、福島出身のすぐれた演奏家を起用して演奏していただいたりという、本当に素晴らしいと思っていまして、先ほど文化課のほうに提出ということをお聞きしたのですけれども、議会としてもこういった部分、ぜひともバックアップしていきたいなと思っているのですけれども、現状、提出いただいて、どうなっているのかかわからないようなお話でしたけれども、ニュアンス的には前向きな回答みたいなのはいただいているものなのですか。それとも、とりあえず承りましたみたいな感じなのが現状なのか、その辺ちょっとお伺いできればと思うのですけれども。

(三浦尚之参考人) 正直申し上げまして、古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーというのがございまして、これに手いっぱいです。ですから、これはメインには観光、観光のことで一生懸命だと思いますし、それは福島の活性化につながりますし、それからエールにもつながっていった、エールの後もつながると思いますけれども、ただ観光というのはいつまで続くのか。これはNHK自体が言っていますけれども、すぐにポシャってしまいますよと言っています。正直、聞いております。ということと考えますと、わかりませんけれども、こちらで手いっぱいなので、私が提案したのは随分前から、9月ごろですから、おそらくどうなっているかわかりません。正直言ってわかりません。

(川又康彦委員) 確かに来年度、エールにかかわって、第1楽章から第3楽章までということで、観光面を中心に、文化振興課もかかわりますけれども、それ以外の、特に観光関係の部署が中心になって実際には動かざるを得ないのが現状なのかなと思いますが、三浦先生おっしゃったとおり、2021年度からなり、音楽を通した福島のまちづくりというのを考えていく際には非常に重要なことなのかなという気もいたしますので、経済民生常任委員会、多分メンバー全員同じ思いなのかなと思っておりますので、バックアップしていきたいなと思っております。

以上です。

(二階堂武文委員) きょうは本当に、昨日もちっとお時間を頂戴しまして、いろいろ熱いお話をお伺いしまして、ありがとうございます。

先生がミュージック・フロム・ジャパン立ち上げられて、はや45周年の時を迎え、もうすぐ半世紀

と。この活動の中には本当に山も谷もいろいろあったかと思いますが、それを支えて、今こういった形で2020年を迎えて、郷土に新しい、100年先を見通したいろいろご提案というか、頂戴するに至っているのですが、この活動を支え続けたものの中心部にある、その熱いものを支えているもの、それは、先生、何なのでしょう。

（三浦尚之参考人）何でしょうか。東北人の粘りというか、あるいはしつこさというか、一度やろうと思ったら絶対に終わるまでは、成功するかしないかは別として、やるということではないかと思います。実はこれはちょっと余談になりますけれども、私がアメリカに行ってすぐに入ったオーケストラがアメリカン・シンフォニー・オーケストラという。ここは、レオポルド・ストコフスキーという非常に有名な、フィラデルフィアを創設した方なのですが、それで自分のオーケストラをつくりたいと。そのときに彼は3つの条件がありまして、人種差別がないこと、年齢の差別がないこと、男女の差別がないこと、この3つを条件にしてオーケストラをつくったのです。私も日本人でしたが、入ることができました。彼が言ったことは、いつでも言うことなのなのですが、ドゥー・ベターと言うのです。英語でドゥー・ベター。ドゥー・ベストではないのです。ベストを尽くしなさいではないのです。毎日、きょうもできなかったらあしたもできるように、あしたよりもあさってがいいようにと。結局進歩するということなのなのですが、そういうことを教わりました。つまりベストを尽くして、ああ、それでいいのだというのではなくて、そうではなくて、必ず次は、次のステップがあるはずだということで、継続してできたのもその言葉が身にしみて感じたのではないかなと思います。毎年毎年新しいもの、何かつくる、継続していきたいということで、毎回プログラムも変えていますし、いろんな方々との出会いがあって、その方々がみんなサポートしていただいたと、そういう方々に感謝を込めて、継続してくれということがありましたものですから、やってきた次第です。

（川又康彦委員）済みません。事前の質問と少し外れてしまう可能性もあるのですが、先生は音楽堂でのいろいろなイベントとか、そういったものについて総合アドバイザーということで、これまでいろいろお力添えいただいていたかと思うのです。福島市の東口に今度新たな複合施設のほうを計画しておりまして、その施設の中でも演劇ですとか、音楽ですとか、そういったものにも使える多目的ホールというのができ上がっていくのかなと思っているのですが、そういったものにも専門的知見からのいろいろなご意見を賜ることというのは非常に重要なのではないかと我々会派のほうでも常々申し上げてきたところなのですが、三浦先生に対して、その複合施設に対しての何らかのご相談とか、そういったものというのはこれまで福島市から何らかあったとか、そういったものというものはあるのでしょうか。

（三浦尚之参考人）正式にはございません。ただ、それを創設したいという方とは長い間おつき合いをさせていただいて、どういうものをつくる予定だということは聞いております。ただ、中身についてどうこうというアドバイスとか、あるいはどうしたらいいかということは一切ございません。1つ

言われたのは、何年か後ですか、忘れましたけれども、どっちみち三浦はいないのだろうからと言われました。それは冗談ですけれども。

（二階堂武文委員長）せっかくの機会ですので、いかがなものでしょうか。

（佐々木優委員）先生は、ニューヨークと福島を行ったり来たりされていて、福島を外から見る機会がたくさんあると思うのですが、福島の外から見たよさというか、感じるものがもしあれば教えていただきたいなど。

（三浦尚之参考人）福島は非常に、まず天気もいいですし、天候がいいというか、そういう自然に恵まれているということです。結局、景色もいいのですけれども、そういうことだけではなくて、果物もいいとか、温泉もいいとか、それだけではなくて、人間、福島の人たちというのは非常に温かく、そして決して自分が、自分がというような、そういう何か余り、積極性がないという、悪い言葉で言うとなのですけれども、非常にナイーブ、素朴であって、非常に人情があって、福島の人たちというのは非常に温かいです、ある意味で。そういったところが僕は大好きです。福島で生まれたということに誇りを持っています。ほかで生まれたらそんなことは言えないと思いますけれども、福島のよさというのは人ではないかなと思っています。そういう人材をこれからも文化、芸術を通して育成していくチャンスがあればうれしいかなと思っていますけれども。

（石山波恵委員）きょうは本当にいろいろありがとうございました。

私は、実は三浦先生とは、学院短大で私授業を教えておりましたときに何度もお会いにはしていましたが、先生のお話でやはり印象に残ったのが、板野氏や、また土屋氏とかと出会いということで、本当に出会いは一瞬ですけれども、出会えば一生になるなという思いがしました。やはりもちろん先生の人柄のよさとか、それぞれ恵まれたというところもあるのですが、やはり長い年月かかって、先生が諦めない強い信念を持ってやられたことが今こういう結果になったということをきょうつくづく感じ、私は本当に去年、おとしぐらいから商工会議所とかのところでいろいろな古関裕而先生にちなんだところでいろいろ生徒を出して踊ったり、署名活動をしたりという、そんなことで一、二年でなったのかなと思ったれば、とんでもない、昔からなったということを見たときに、すごく重荷を感じましたし、2020のこの年は福島にとって本当に勝負の年だというふうに、今後10年、20年後の福島を考えるといます。先生がご提案していただいたコンクールとか、あと楽団、すごくいいなと思ったのですが、実際私がいろいろ催し物をやると、福島って文化的レベルがすごく本当に薄いというか、いいコンサートがみんな郡山とか、逆に喜多方のほうに持っていかれてしまったり、福島にいいアーティストが来ても、例えばとうほう・みんなの文化センターを満杯にしたりとかってなかなかなくて、その中でこういうコンクールをしたり、こうやって、人が本当に集まるのかなとか、何かそういうふうなものがすごく思って、先生がニューヨークのほうで最初MFJをやるときの一歩って、最初、本当に何も無いところから、ましてニューヨークでスタートするということからスタートしたと思うのですが、福島で私たちも、自分のことだけだと、ダンスのこと

はわかるのですけれども、新しく福島に古関裕而氏のコンクールとか、50年、100年続くものをつくろうと思ったときに、誰を頼るではないけれども、自分たちから何を始めたら一番いいのか、どういうふうな骨組みで、これを実現するにはどうしていったらいいのだろうというのがちょっと全く無なものですから、その部分、まずこれをやって、こんな形でという何かアドバイスとか、経験から上、何か一言言っていたいただければと思います。

（三浦尚之参考人）やっぱり組織をつくることだと思うのです。それも形式的な組織ではなくて、実際に自分たちがやってくれる人たちの組織をつくっていくと。そうではないと、机上の上でこれはできませんので、やっぱり組織をしっかりとつakって、興味ある人で自分でも動いてくださる方々の組織をつくっていく必要があるのではないかと思いますけれども。そうしないと、なかなか顔ぶれがみんなすぐれた、有名な方々でも、実際に動くとなると、情熱がないですから、ある程度そういったことを、実行委員会でも何でもいいのですけれども、組織をつくって、やっていかないといけないのではないかなと思いますけれども。すごく膨大なお金をかけるわけでもないものですから、必ずできないことはないと思います。ただ、いつまでも私がやれるわけでもないですから、どなたか継続してもらえれば大変うれしいことですけれども。ただ、やっぱりできたら夢をかなえられれば、私の生涯の夢である、希望であります。

（高木直人委員）先生、本日は大変貴重なご意見ありがとうございました。本当に長年の先生のご努力によって今回のエールの放映が実現したことをきょう初めて知りまして、本当に感謝申し上げます。

私どもも今、せっかくのこの機会ですので、エールの放映ということで、全国に古関裕而氏を知っていただく絶好の機会でございますし、また何とかこの機会を生かして福島市を活性化させたいということで今模索をしておるところでございますし、先ほど先生からご提案いただいた例えば温泉地に著名なアーティストをお呼びして、1週間フェスティバルとか、本当に世界中からそのアーティストの演奏を求めて福島に人が集まるなんていうのは本当に夢がある企画だと思いますけれども、例えば当時、15年ほど前でしょうか、ヨーヨー・マを先生ご提案されたということでございましたけれども、当時、例えばこのヨーヨー・マを提案して、もし市のほうで、ではそれをやりましようとなったときに、それは実現の可能性は当時あったのか、また現在、同じように私どもが提案をさせていただいて、それが実際、では福島で著名なアーティストを呼んでやりましようといったときに、例えばどういう方を先生、今でしたら、例えば招聘してはどうでしょうかというふうにご提案いただけるのか、そのあたりをお伺いしたいと思います。

（三浦尚之参考人）その当時は、私もヨーヨー・マを直接知っておりました。メールアドレスも知っておりましたし、秘書の方も知っておりましたけれども、大分前なので、今はどうか分かりません。それが1つです。では、今はどうなのかというと、その当時はやっぱりお金のこともあるのですけれども、そこまでそのときの市長さんが興味を持ったかということ、なかったと思います。なかったというのは、彼が興味がないということではなくて、費用対効果のことも含めて、なかったのではないかな、

できなかったのではないかと思います。今はどうかなということで、やっぱり本当に世界中で、あつ、この人という、これは別に音楽でなくてもいいのです。この人だったらぜひとも習ってみたいという人を世界の著名人をお招きして、福島に来ていただければ、世界中から来る、来てくれるのではないかと、予想ですけども。それに対しての私はまだ考えておりませんので、その当時はヨーヨー・マということを考えましたけれども、あるいは内田光子というのがピアニストでいるのですけれども、この方はロンドンに住んでおりまして、それでニューヨークではカーネギーホールを毎回満員にします。日本人なのですけれども、日本では余り演奏活動していません。ただ、ヨーロッパと、それからニューヨークではしょっちゅうやっておりますけれども。彼女なんかが来てくれれば、世界中からおそく来ると思います。日本人ですし、コンタクトはできないことはないと思いますけれども、わかりませんけれども。エールのことで精いっぱいでしたから、そこまで考えておりません。失礼しました。

（阿部 亨委員）きょうは本当にありがとうございました。

古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーという、古関裕而氏に触れ、親しむということで、本当に一般の市民の方が触れる、知るということに関してなのですけども、先生おっしゃったコンクールとかをこれからやっていくと、この辺も十分わかりますが、本当にごく我々一般市民の方、私なんていうのは出身中学の校歌の作曲とかやっていたと、あと古関先生の肖像画ですか、いわゆるあのイメージありますね。あの辺は十分承知はしているのですけれども、これからの今の若い世代の方とか、あと一般的に年配の方でも、知らない方ってやっぱりかなりいるわけなのです。身近なところという形では、いろいろこれやっています、今。電話の保留音とか、そういうのもあるのですけれども、もっと市民生活なり市民の方に知っていただくというような、何かそういうものという、何か先生考えられるものってありますか。やはりまず知っていただくことが一番だと思うのです。朝ドラなんかを本当にこれから見れば、理解して、わかってくる部分はあると思うのです。その辺をもうちょっと知っていただく、市民の方、まずみずから知っていただく部分で何か考えられるものがあれば教えていただきたいと思うのですけれども。

（三浦尚之参考人）そうなのですね。実感しています。なかなか古関裕而記念館も、私が知っている限りでは、去年までは余り福島市民が訪ねなかったです。ことしに入って大分、エールのことも含めまして、例えば温泉に行った方々が帰りにバスツアーで古関裕而記念館に来るなんていうこともありますけれども。ただ、市民にというところで、レベルがあると思うのです。例えば古関裕而音楽祭というのを毎年やっていたのですけれども、いつも無料なのです。これは、無料ですから、3,000名の応募があったときに1,000名だけが入れるということになっているわけなのですけれども、去年は有料に、1,000円の有料にしたのです。それでも満員になりました。2回やりましたけれども。だから、なかなか市民の方々が、例えば年齢的にもよるのですけれども、子供たちはほとんどわからないです。伝承というのは難しかったです。20年間、古関裕而音楽祭の委員会も私も最初からやっていますけれ

ども、伝承という言葉は出るのですけれども、それをどのようにして伝承したらいいかというのは、これは昔非常に大きな課題でした。今でもできないと思います。だから、今回エールによって、このコンクールで古関裕而の作品にちなんだ曲を書くことによって、小学校、中学校に楽譜を送って、演奏してもらおうということを何らかの形で、教育委員会を通して、やれば、古関裕而の名前だけは少なくとも知っていただけるのではないかなと思いますけれども、それで興味を持った若者たちが、ああ、こういう人が福島の人なのだなということで再認識していただけるのではないかなと思うのですけれども。今すぐにはちょっと回答が出ない感じです。

(二階堂武文委員長) 時間も押してまいりました。

最後に、山岸委員が議長を務めていたときに旧議場で雅楽の演奏をされたというご縁があったというお話をお伺いしまして、最後に山岸委員のほうから。

(山岸 清委員) どうも、先生、御無沙汰しております。前はもっと若かったのだ。私何も聞くものなくてあれなのですが、本当にこれだけご努力いただいて、ありがとうございます。やっぱり来年度かい、今度エールが始まれば、それなりに古関さんでいくのだけれども、その後のレガシーというか、延長線というか、そういうのを大事にしなければならないなと私は思っているのです。やっぱりエールの視聴率、NHKいないから、言うのだけれども、上げてやらなければだめだね。今回いってんは余り人気なかったのだな。視聴率よくない。やっぱり今度古関のエールがすごく上がって、おしんも朝だったっけか。おしんなんてすごいんだから。もうアラビアあたりだと90%だなんていうのだ。イランあたりかい。だから、そのくらいの例えばエールが視聴率上がっていれば、これは大河ドラマにもなるよ。今時代劇なんていうけれども、いってんは時代劇でないからね、大河ドラマで。だから、あと五、六年もして、NHKで、だって、今度明智光秀なのだよ。だから、エールも大河ドラマになるくらい視聴率上げてやれば、これはいいなと思うのだよね。あと、余り、先生にはもうお礼だけ言って終わろうと思ったのですが、私も今回エールになったと聞いたから、選挙あったでしょう、この間。だから、選挙で歌を歌って、古関裕而の歌を歌ってやらなければならないなんて俺が言ったら、うちの選対でがっと抑えつけられた。真面目さがないなんて言われる。だから、今度は議会で、次の選挙のときからは古関裕而の歌を歌ってから流すとか。本当だよ。共産党は長崎の鐘でいいのだから。あれ反戦歌だから。そういうふうにしてやっぱりみんなで盛り上げないと、私は、先生への質問でないけれども、今回エールがなって、うんとうれしいの。要するに楽都、さっき川又さん言ったか、郡山に持っていかれたような気がするけれども、福島は大学の学、福大から学院大から聖母から、大学あるでしょう。それから、山も、吾妻山から信夫山、信夫山は岳までいかないけれども。あとそれに、今度音楽の楽で、楽都です。3つのガクがそろった市なんていうのはそうないから。だから、これは福島はやらなければならない。ただ、一番難しいのは音楽の楽だね。これが先生言うように伝承も難しいし、ただ、要するに芸術だから、つかまりどころがなかなか、俺みたいに音痴なやつは歌わなくなってしまうりするし、だからそこらをやっぱりどうやっていくか。ただ、いいのは、古関さんは

あっちこっちの大学の果てから学校のあれまで作曲しているから、これらをやっぱり十分生かして、今後頑張っていきたいと思います。とにかくお礼までの一般討論で。

（小松良行委員）今山岸委員からもあったし、私も、阿部委員もそうですけれども、私のところも北信中学校、これ校歌があるから、私ら世代までは当然のことながら音楽の先生、こういう有名な作曲家の校歌で、誇りに思えた時代だったですし、忘れもしないのは小学校6年生のときの鼓笛パレードのときに若い力を演奏していたので、そういう意味ではずっと頭から離れないのは当然なのですから、実際のところ、山岸さんとよく話しているのは、歌謡曲、はやり歌、いわゆるそういうものが余りつくっていない、世に出ていない。専らいわゆるマーチ、応援歌、そういったものが中心になると、我々はいいいのですが、なかなかほかの人たちにどうやって伝えていくのかなというのが難しい。しかし、こうした取り組み、音楽祭などの取り組みを定期的に行うこととあわせて、今福島の町なかでは楽器屋さんとか何かが事務局になって、いろんな音楽を、ブースをつくって、ボランティアで招聘をして、発表の場をつくったりしている取り組みなんかが毎年行われております。年額50万円ぐらいの補助でもって、なかなか有名な演奏家を呼べないのだからという嘆きの声もあるのですが、それでも頑張っている。また、参加者も喜んで発表しているのです。こういったものをうまく組み合わせることで、いわゆるまちのにぎやかさや、それからこうしたコンクールという格式高く、我々なかなかそういうものを聞いて評価できるほど音楽についてはわからないのですが、こういったものの連携とか、さまざまな小さな市民の音楽、あるいは文化、芸術的な取り組みと抱き合わせていくことで、何か形になっていくのではないかなというのを、今お話聞いていて、感じたところだったのですが、先生、ほかのいろいろなまちなどで、音楽を中心とした文化やまちづくりなどと、今の私の意見開陳ですが、それについてコメントなどありましたらお願いしたいと。

（三浦尚之参考人）実は郡山、市長をはじめ、物すごくやきもちをやいています。これは実際に聞きました。やっぱり福島で古関裕而のエールをやるということで、ショックだったらしいです。郡山ですよ。僕は、ほかの都市は知りません。ただ、郡山は少なくとも市長をはじめみんなが、どうしたのとは聞きませんでしたけれども、言われました。ショックだったみたいです。楽都がこちらに来たという感じで、何かショックだったようなのですけれども、非常に残念がっていました。

（小松良行委員）ポテンシャルは、だから福島はいっぱい、先ほど川又委員も言ったけれども、先生が先ほど説明された、本当に小さなポテンシャルというか、原動力はある。要するにこれ、どういふふういろいろ火をつけたり、もっといろんな仲間に加わってもらったり、熱を持って、熱意を持って一つ一つに取り組んでいくということ、そして継続ですね、先生おっしゃっていらした。ぜひ頑張っていきたいなと思いました。

（二階堂武文委員長）そろそろ予定されていた時間に近づいてまいりました。そろそろよろしいでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員長) それでは、三浦参考人、本当にありがとうございました。

以上で質疑を終了したいと思います。

この際、参考人の三浦尚之様には、委員会を代表して一言お礼を申し上げます。本日はお忙しい中、経済民生常任委員会のためにご出席いただきまして、本当にありがとうございました。また、貴重なご意見を述べていただきました。心から感謝申し上げます。きょうの話を生かして、ぜひ古関裕而さんを使つての福島市のこれからの発展を委員会としても検討してまいりたいと思います。きょうは本当にありがとうございました。

それでは、暫時休憩をいたします。

午後 3 時00分 休 憩

午後 3 時05分 再 開

(二階堂武文委員長) それでは、委員会を再開します。

以上で本日の参考人招致を終了いたします。

それでは、本日の参考人招致の意見開陳を行います。本日聴取した項目に関してご意見のある方はお述べください。

(小松良行委員) 三浦参考人のこうした音楽に携わる長いキャリアと、そして幅広い人脈を通して、またご縁あって私ども福島市がアドバイザーとして10年前からお世話になっている関係の中で、この福島の名誉市民でもある古関裕而氏を題材にということから、今回のエールの決定がなされてきた経緯というものに深く感銘を受けたところではありますが、その古関裕而、また金子夫妻との私はどれほど魅力を持って、あるいは情熱を持って取り組んでこられたのかなというところに非常に興味を持っておりました。音楽に対する哀愁というものを非常にやっぱりこの福島の風土、これと非常に結びついていて、共感を持っている、またその楽曲等々が広く国内の方々に愛されているという点を非常に参考人は尊崇されていて、こういった結果、こうした朝ドラに至ったのだろうなと。しかし、我々は、朝ドラはぜひ全国で古関裕而氏を知っていただいて、盛り上がってもらいたいという思いは当然なのですが、これをいかにまちづくりに生かしていくのか。参考人のご意見の中には、文化、それと文化を通じた人づくりなのだとということをおっしゃっておられました。やはりどうしても音楽にすごく好きな人、楽器を弾く、演奏家などは当然音楽を身近に感じているのでしょうけれども、ふだんの生活では、私などは専らお酒を飲んでカラオケを歌うぐらいしか能のない男なのですが、音楽を好きな人たちが音楽という文化を通じて人間形成を図っていくといった取り組み、またこういったさまざまな企画や考えを具現化していくのには組織をしっかりと構築して、仲間をふやして、組織づくりが大切なのだというところをおっしゃっておられました。今後福島が、今、古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーという企画で、商工会議所やさまざまな民間団体とともに、これらの事業の実現と、また進められていくことと思いますけれども、新たな、議会から発信していくのですが、市民からの

さまざまな熱意あるいは要望に応じて、小さな組織、それから大きな熱量を持った人たちをたくさんやっぱり集めて、そうした人たちの声を拾い上げて、今後これらの継続性の大きな力になっていくのだろうなという思いがいたしました。本当にテレビでは拝見したことはありましたし、一応こうした音楽のアドバイザーしていることは知っていましたが、本当に三浦氏にお会いできる機会ができましたことは本当にありがたいことだと思っております。意見の開陳としたいと思います。

（山岸 清委員）小松さんおっしゃるとおりなのだけれども、やっぱりその次の、いろんなコンクールとか、いろいろきょうは提案2つほどあったけれども、今後の、その後の、放送後の対策が大事だなと考えました。

以上です。

（川又康彦委員）今回三浦さんをお招きして、さまざまなお話を伺わせていただいて、福島市のほうでシンフォニーということで第3楽章まで、できれば第4楽章もやってもらいたいというお話いただいて、三浦さんから2つの提案いただいたのも、古関裕而の観光面だけの取り組みだけではなく、やはりその後の取り組みというのが非常に重要なのだなということを改めて認識しまして、今回この調査事項で6月が提言というところまで持っていくのだと思っているのですけれども、エールで何をやるのかという部分はある程度もう来年の当初予算でほぼ決まってしまうので、この常任委員会の中でも常々言っていますけれども、古関裕而さんはやっぱりきっかけなので、音楽を通した福島のまちづくりというところにどういうふうにつなげていくのかというところまである程度踏み込んで持っていく必要があるのかなということを改めて確認させていただきました。

以上です。

（阿部 亨委員）大体皆様がお話出たとおりだと思うのですが、特に音楽の専門性とか、そういうものというのは、嗜好性とかもあるし、私も素人でよくわからない部分というのは十分ありますし、それは本当に今川又さん言ったように、古関裕而さんが一つのツール、きっかけとかになって、古関裕而を通した音楽性、その後に続くことがやっぱり一番大切なことなのだなと思うのです。本当に一番市民の皆様が触れるところ、身近に感じるところ、そして皆さんに浸透する部分という部分は何なのかなという部分がなかなか難しいし、そういう先生もなかなかわからない。そこで、1つ、伝承ということで、小中学生とか子供たちへの教育面という部分が出てきますよね。そういう部分というのは本当に大切な部分ではある。その後に続く部分という部分、そういう部分はやはりやっていくべきことなのではあるなとは感じました。ですので、伝承という部分に関しては重要な部分なのかなというふうには考えると、やっぱり何らかの策というか、やっぱりしていかななくてはならないのだなとは強く感じました。

以上です。

（川又康彦委員）私も、今阿部委員おっしゃったとおり、古関裕而さんの伝承とか、そういった部分が1つと、もう一つは音楽を通したまちづくりという部分で、古関裕而先生の音楽のきっかけになっ

たのが、小学校の先生が作曲をそのものを小学校の生徒に行わせていたという、そういう教育のあり方というところから古関裕而先生というのは生まれてきたのだなというのを改めて認識したので、古関裕而先生を広めることももちろん大事ですけれども、古関裕而先生を超えるような音楽家を育てていくために福島市として何をしていくべきなのかというところは重要なかなと感じました。そのためのコンクールでもあり、そういった部分なのかなとも、三浦さんのお話を伺っても、思います。

（石山波恵委員）やはり古関裕而氏をこれからどういうふうに広めていくかということを考え、継承していく、伝承していくというと、例えば樂團をつくったり、クラシックファンの人だけを集めたり、一部の人たちだけを対象にすると、狭き門になってしまうし、みんなに浸透しないと思うので、例えば古関裕而コンクールとしてもいいのですけれども、例えば古関裕而フェスティバルみたいな形で、例えばこの前、古関裕而氏の2回あったとあって、私も一緒に作品、行ったのですけれども、あのときは加藤登紀子さんが来て、やりましたよね。例えば同じ歌とか音楽でも、それが例えば若者に人気のあるアーティストが古関裕而さんのをやったら、若者の人たちがそこに来たりして、やはり呼ぶアーティストによっても少し底辺を拡大することができたり、あとは歴史を、古関裕而氏のいいところは残しながら、今の新しいものも取り入れながら、何かをつくっていくということも大事なのではないかなということを考えました。もちろん年配の人で知っている人は多いし、年配の人でさえ知らない人もいます。でも、子供とかは、校歌はわかるけれども、ほかのところはわからないというところを、そこをどういうふうにするのかといったときは、やはり同じ古関裕而氏の曲とかも新しいアーティストとか人気のアーティストの人を呼んだり、いろんな若者の人を取り込むことによって、また新しい世代の発掘とかもできるかなんと思ったので、やはりそんないろんなものを向けながら、コンクールだけにとどまらず、フェスティバルみたいな形でいろんなものをいろんな形で取り入れる、合唱やる人もいたり、楽器やる人もいたり、踊る人もいたり、またいろいろそれで手話やる人もいたり、いろんな人たちが融合して、まちづくりとかという、いろんな分野でというのも一つの捉え方かなと思いました。

以上です。

（高木直人委員）私もきょう本当に三浦先生の貴重なさまざまな意見いただいて、やっぱり先ほど阿部委員言われたとおり、伝承が難しかったと過去形でおっしゃられたのが非常に印象深かったのです。できなかったみたいなことを言われたのがすごく印象に残ってしまっていて、なのでやはりすごく大事なことだなというか、どうしても私もやっぱり古関裕而氏を生かして、市のにぎわいづくりというほうにばかりちょっと私はどちらかというと頭が行ってしまっていたのですけれども、やはり次の世代にふるさとのすばらしい作曲家を伝承していく、伝えていくということも、このエール放映の機会に考えていかなければいけないのだなというのをきょう改めて感じました。ですから、本当に単にそういうにぎわいづくりとか経済面のことではなくて、さまざまな機会を通して、何か子供たちが古関裕而氏をより深く知る機会というか、あとは学校の中でも、例えばこういったところは教育委員会との連

携とかも必要になってくるのかもかもしれませんけれども、この機会にもう一度ふるさとのそういった偉大な作曲家を知るような、そういったカリキュラムというか、それも何かこの機会に考えていければなというふうに、ちょっときょう反省もしました、逆に。今までこう見ていたのが、やっぱりもっと伝承とか、そういったところまで考えなければいけないということは今回考えさせられました。

以上です。

(佐々木優委員) 皆さんとほぼ同じなのですけども、やっぱり100年続けていくことができるというところにキーワードが私はあると思ったのですけれども、古関裕而さんというすごい作曲家がいて、いろんな応援する曲をいっぱいつくってきたという、子供たちにとってはそういうすごい人が福島から育って、生まれ育っていったのだということを、曲は知らなくても、そういうすごい人が福島から出ていくのだということを誇りに思えるような、そういう継承の仕方ができたらいいかなというふうにきょう感じました。曲がわからなくても、そういうすごい先輩がいるのだと思えば、何かすごく未来が開けてくるかなと思いますし、やっぱり小学校から先生が作曲をしてもいいよという、そういうすごく夢がある学校時代を過ごしていたのだとか、そういうことが行われて、そういう古関さんみたいな人が生まれたということはすごく子供たちにとっても重要な情報かなというふうに思うので、エールを見て、この人が福島からというふうな夢と希望の持てるような、そしてそれをずっと続けていけるためには、三浦先生が提案したコンクールとか、今石山さんが言ったようなみんなが参加できる、そういうフェスティバルみたいな、そういう形で続けていけるもの、100年続けていけるものがつくられていけば、物すごくいいのではないかなと思いました。

(二階堂武文委員) 私も、3つかな。三浦参考人がNHKへの働きかけということで苦労されたという中で、情熱を持って、大きな熱量を持って、ようやくエール放映までこぎつけたというか、たどり着けたわけなのですけども、その情熱を実はきょう私どもに向けていただいたというふうに受けとめております。私どもは、三浦先生の熱い思いのバトンをそれぞれ、それぞれの気持ちの中に種をまかれたというか、いうふうに思っております。そういった形で対峙されたのかなという気がしております。エールが決まるにあたって、NHKでのいきさつというご説明をされました。いろいろトップダウンとか、最終的に決まる経緯を話をされましたが、私も、先ほど出ましたシンフォニー、今回の施策につきましては、もう行政現場は観光で手いっぱい、すぐポシャってしまうのではないかなという限界が感じ取れるというお話をされていました。それは、行政現場の皆さんの仕事と、実はきょう私どもが経済民生常任委員会という政治の場であったり、首長さんであったり、大きなかじを切っていく、新しい一步を踏み出す、その判断力というのはやはり政治的な判断に負うところが大きいのかな。私どもがどれほど長期的な視点で、そういった新しい一步を踏み出す必要性を強く感じ取って、それをやはり次の新しい企画というか、100年先を見越した企画まで練り上げる決断を下す勢いの一つとして経済民生常任委員会がかかわっていくということの必要性、それに期待されてのきょうの三浦先生の熱量だったのかなというふうにまず受けとめました。

それと、先ほどエールは今後アメリカとかヨーロッパでもケーブルテレビ等を通して放映されていくというようなお話がされました。福島人である哀愁を帯びた古関メロディー、古関さんの生い立ちを含めて、古関裕而さんに対する関心であり、それを育んだ福島という風土とか地域に対する興味、そういった下地が、実は今回のエール放映で、下地は一気に世界に広がっていくのだなというのを改めて感じました。このエール、半年間で広げられた下地にどういった次の花を咲かせていくかというのを改めて私どもに課せられた大きな役割だなというのを意識せざるを得なかったというふうに思っております。ぜひ、私も皆さんと思いは一緒です。先生からいただいた熱い思い、熱量の一部を本当に経済民生常任委員会のまとめに向かって、本当に頑張って結実させたいなという思いでおります。本当にありがとうございました。

(小松良行委員) あともう一つ、委員長、これは、今回こうした議会での取り組みをもう少しこういった報道関係の皆様方にもご周知いただいて、議会と、それから市民の人にももっと近づけていかなければならないな、我々の発信力を高めていかなければならないという思いを委員長にお酌み取りいただきまして、一部、これは事務方のほうとしても、当委員会だけこういうことをやっていいのかといったご意見だったり、さまざまだったのですが、私はこのことにご意見を賛同いただいて、委員会の皆さんがぜひやるべきだというふうに踏み出したことというのは、今後大きな成果だと、今回参考人招致という場ではありましたが、大きな成果につながっていけばいいなと、一方でそのことについても感慨深く思っております、委員長には本当に心から感謝と御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

(二階堂武文委員長) ありがとうございます。最終的には経済民生常任委員会としての総意をまとめて、議長の決断を仰いだというところできょうに至ったわけですので、本当に、皆さん、ありがとうございました。

何もなければ、意見の開陳は以上でよろしいでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員長) 次回の委員会で、本日いただいた意見のまとめを行いたいと思います。

次に、当局説明意見開陳のまとめについてを議題といたします。

お手元に配付しております資料で、所管事務調査当局説明のまとめと書かれた資料をごらんください。この資料をもとに、昨年12月20日に実施した当局説明のまとめを行ってまいりたいと思います。

まず、当局説明の概要ですが、一番上に書かれているとおり、当局では、平成31年2月28日にNHK連続テレビ小説、エールの放映決定を受けて、古関裕而氏を生かしたまちづくりを市民協働により推進していくため、古関裕而のまち・ふくしま協議会を立ち上げ、どのようなまちづくりを推進していくかを具体化した古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーを策定。現在、そのシンフォニーに基づきさまざまな取り組みを実施しているという状況であったかと思えます。

古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーについては、記載のとおりになります。第1楽章、古関裕

而に触れ、親しむ、第2楽章、古関裕而のまち福島のまちづくり、第3楽章、古関レガシーを生かした新たな文化、観光振興という内容から構成されており、数多くの事業を網羅的に取り組む内容となっていました。資料には、枠組みされている部分に現在取り組んでいる、取り組んできた事業、次のページの枠組みにされている部分に今後取り組む予定の事業として、主なものですが、分けて整理させていただいておりますので、後ほどご確認いただければと思います。ざっと見てもこれだけの事業が今後も予定されているということで、かなりのボリューム感があるのが当局説明からわかったかと思います。

また、枠組みの下の部分ですが、当局では、これまで多岐にわたるさまざまな取り組みを実施し、商工会議所による民の取り組みも進んでいる中で、今後の古関裕而のまち・ふくしまシンフォニー推進にあたっては、古関裕而氏や氏の楽曲を若い世代へ浸透させていくことが大きな課題として捉えているとの説明もありました。

以上のような説明を受け、その後の意見開陳では主に記載のような意見が出されたところであり、特に一度に取り組む事業のボリュームの多さや市民がついてこれるのかというところが問題として挙げられたかと思います。

このことから、委員会としては、資料の下の方の中のとおり、当局の取り組みは、今後も多岐にわたるさまざまな取り組みが検討されており、現時点では十分な内容として感じられるが、その反面、このまま取り組むと市民が置き去りになる懸念があることが大きな課題として当局説明をまとめたはどうかと考えております。

今後、まちづくりの主役である市民としっかりと歩調を合わせ、シンフォニーの効果を最大限に高めることで、ドラマ放映終了後も長く続いていくためにはどのような事業に力を注ぐべきなのかを委員会で整理して、当局に提言していくことが大切ではないかと思います。

以上のような形で当局説明のまとめとしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(小松良行委員) ちょっと1点だけ。既に置き去りにされているように聞こえてしまったので、今の中で、今後、我々も初めてこうした福島市の取り組みの総ざらいを伺って、今回の意見開陳だったわけではありますが、ぜひこれらを市政だよりなりホームページなり、私たちもそれぞれの立場で、こんな取り組みが進められようとしているということをどんどん発信していくことで、置き去りにしないようにというか、ならないようにやっぱり進めていくべきなのだなというふうに改めて感じました。意見として。

(二階堂武文委員長) 私も……ここで意見を言っているのかな。

(小松良行委員) 自分の意見にまた意見を言うの。

(二階堂武文委員長) 自分の意見に意見を言って、自己反省。その置き去りになる懸念がと、こうあるのですが、これ、なるのではないかという懸念というところで、なるというよりも、なるのではないかという懸念というふうに、私もちょっと言葉が、ちょっと断定的に響いてしまったものですから、

そこは修正でよろしいでしょうか。

それでは、今小松委員からもちょうとご指摘いただいた部分については、市民が置き去りになるのではないかという懸念というところで、ちょっとワンクッション置くような形で、ちょっと修正を加えさせていただくようなことでよろしいでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員長) それでは、当局説明のまとめについてはそのように進めさせていただきます。

次に、行政視察についてを議題といたします。

委員の皆様には既に現在2月3日月曜日から5日水曜日の行程表を一度お渡ししたかと思いますが、改めて宿泊先を入れた行程表を2部お手元に配付しておきましたので、ごらんください。特に初日の集合時間についてですが、午前7時50分、福島駅西口改札前集合ということでよろしくお願ひしたいと思います。

その他の行程の中身については、前回お示ししたものと大きな変更はございませんので、どうぞよろしくお願ひいたします。

なお、JR券等の乗車券や道順等々の地図が入った視察資料は、当日、駅で配付いたします。

また、視察先の取り組み概要をまとめた事前資料をお配りしておりますが、行程表の次の資料としてお手元に配付しておりますので、視察までに各自お読み取りいただき、視察当日も忘れず持参くださいますようお願いいたします。

その他、委員の皆様から何かございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員長) なければ、以上で経済民生常任委員会を終了いたします。本日は長時間にわたりありがとうございました。

午後3時34分 散 会

経済民生常任委員長 二階堂 武文